

越境する粘土板文書と神

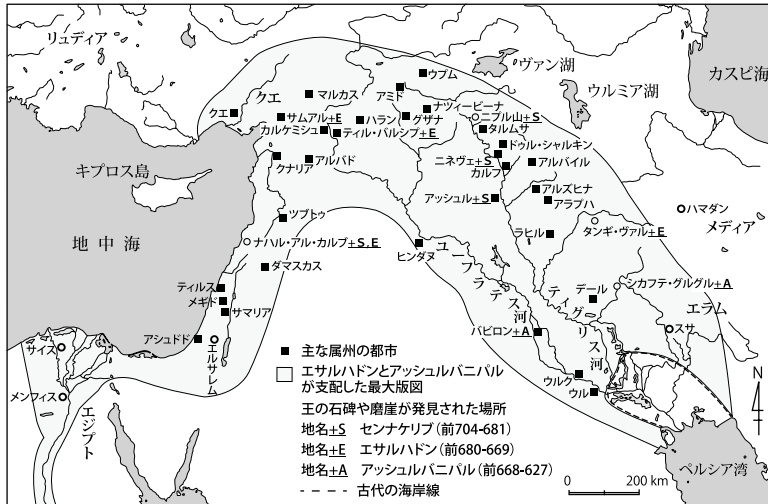
——『エサルハドン王位継承誓約文書』における伝統と革新——

渡辺 和子

はじめに

アッシリア王エサルハドン（在位前 680–669 年）は前 672 年に大量の粘土板文書『エサルハドン王位継承誓約文書』（ESOD = Esarhaddon Succession Oath Documents）を作成させ、アッシリア内外の要人に配布した。その目的は、当時アッシリア王とバビロニア王を兼ねていたエサルハドンが、次のアッシリア王を息子のアッシュルバニパルに、次のバビロニア王を別の息子シャマシュ・シュム・ウキンとした決定を遵守することを配下の人々に誓わせることであった。代表者として誓いを立てた各要人に 1 部ずつ誓約内容が書かれた ESOD の文書が手渡され、子々孫々に語り継ぐとともに、その文書を神として扱うことが要求された。

ESOD には様々な越境を指摘できるが、それらを精査すると、メソポタミア文明の伝統を踏まえた上での越境であることがわかる。メソポタミア文明の特徴の一つは粘土板に楔形文字を記していたことであり、前 3000 年頃に始まり、3000 年ほど続いた（ウォーカー 1995 参照）。ここではメソポタミア北部のアッシュル（図版 1 参照）を中心にして興った国アッシリア（前 2000 年頃–前 612 年。渡辺 2009 参照）が、メソポタミアの伝統を取り入れ、また独自の伝統を作り出しながら発展した歴史的経過を視野に入れて考察する。なお近年、アッシリアの初期段階の暦制に関する新



図版 1：アッシリアの最大版図。アッシュルバニバル（在位前 668-627 年）に達成された。しかしユダ王国のエルサレム、エジプトのサイス、メンフィスなどはアッシリアの州とはされなかった（図版 5a, 5b 参照）。渡辺 2017、10。

文書によって、前 2 千年紀初頭のアッシュルを中心とする都市国家とその民によるアナトリアでの商業活動及びそれに関する文書の年代がより正確に解明された（Barjamovic et. al. 2012; 渡辺 2009、657-663 参照）。

1955 年にニムルド（古代のカルフ。図版 1 参照）で ESOD のニムルド版が 9 部¹⁾ 発見された。それらが D. J. ワイズマンによって「エサルハドン宗主権条約」（Wiseman 1958a）として出版されて以来、特に旧約聖書の「契約」形式との関連（Koch 2008 ほか）や『申命記』28 章に見られる多くの呪いの言葉（Weinfeld 1972 ほか）との類似が目された。

筆者は ESOD の新断片（大英博物館に保管されていた未登録、未公刊断片）を加えた再編纂を行い、テキストの新しい読み方、翻訳、解釈などを提出したが（Watanabe 1987）、その要点が広く理解されたとは言い難い。ところが奇跡的なことに 2009 年にトロント大学の発掘隊がトルコ南部のテル・タイナトで ESOD の 1 部（タイナト版）を発見し、2012 年にローインガーによって公刊された（Lauinger 2012）ため、筆者は拙著の

テキスト編纂部分にタイナト版のテキストを加えて再編纂し、新解釈を加えて改訂版（日本語）を出版した（渡辺 2017）。²⁾ 現在のところ、ESOD は出土地を異にする 3 つの版（ニムルド版、アッシュル版、タイナト版）によって知られる。³⁾ なお現在、ニムルド版の粘土板群は、大英博物館とバグダッドのイラク博物館で半数ずつ保管されている。本論では様々な点で「規格外」の粘土板文書である ESOD と、そのテキスト及び印章印影からアッシリアの最高神アッシュルの越境について考察してみたい。

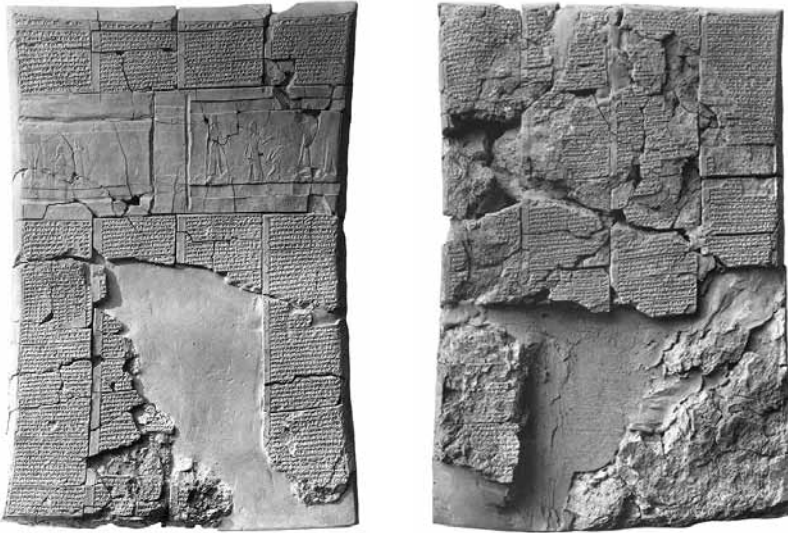
I. 粘土板文書の越境——特異性と革新性

I.1. 最大の粘土板文書

ニムルド版の 9 部は粉々になった状態で発見されたために、その全体像を復元する試みは、ピースが揃った一組のジグソーパズルよりもはるかに難易度が高い。しかし 9 部すべてほぼ同じ文面をもつことがわかると、復元作業も加速していった。最も多くの行数が復元されたのは N27 (ND4327; 図版 2) であり、縦×横が 45.8×30 cm である。⁴⁾ これは現在知られている粘土板のなかで最大であるが、ESOD の粘土板のこのように法外な大きさには、理由があると思われる (IV.3. 参照)。

ニムルド版の 9 部のうち、誓約者の名前とその居住地方名がわかる 6 名が、アッシリアの東に位置するメディア地方の小領主たちであった。その事実は、ワイズマンが「宗主権条約」と判断する出発点となった。しかしその者たちに手渡されるべき文書がなぜ、アッシリアの中心部のニムルドで発見されたのかは謎であり、いくつかの憶測が出されている。⁵⁾

それに対してタイナト版 (図版 3a, 3b) はもとあった場所で (*in situ*)、すなわちテル・タイナト遺跡の中央に位置する「古い神殿」の最奥 (至聖所) で発見された (図版 4a, 4b) ことから、この文書が実際に大量生産、広域配布をされたという (筆者ほか) が支持していた) 説の信憑性が高まっ



図版 2 : ESOD の粘土板 (N 27 = ND 4327)。表面 (左) と裏面 (右)。
45.8×30 cm。イラク博物館蔵。Wiseman 1958, Plate I, IX。



図版 3a : 修復作業中のタイナト版表面。表面が下になって倒れていた状態で当時の戦火で焼かれたために、表面が高温で焼かれることがなく、保存状態が良くない。Lauinger 2012, 88.



図版 3b : 修復作業中のタイナト版裏面。裏面が当時の戦火によってよく焼かれたために、保存状態が良く、ニムルド版では不明であった部分も明らかになった。Lauinger 2012, 89.

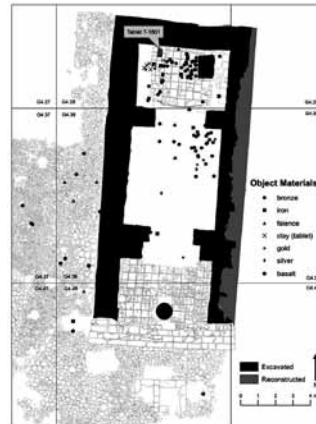
た。その意味で ESOD は世界最古の「マス・メディア」とすれば（渡辺 2017、40）、文書史上の一つの越境現象といえる。

タイナト版は、テル・タイナト（古代のクナリア、図版 1 参照）、アッシリアの一つの州都⁶⁾に派遣されていたアッシリアの代官が、誓約儀礼に参加した後に持ち帰って、任地の神殿に礼拝対象として安置したと考えられる。タイナト版の大きさは 40×28 cm (Lauinger 2012, 90) であり、ニムルド版よりも少し小さい。私見ではこのような大きさの設定は、「代官のための文面」（たとえば、代官は交替するので固有名詞ではなく、職名が宛名とされるなど）とともに決められていた可能性がある。

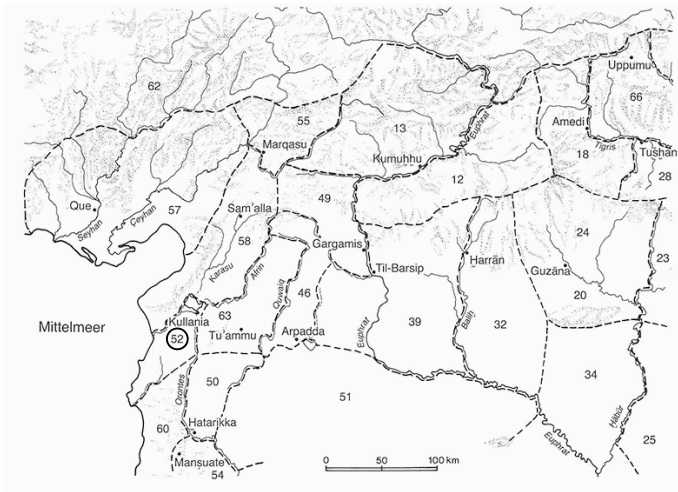
アッシリアが最大版図を達成するのは、アッシュルバニパルの治世（前 668–627 年）であり（図版 1 参照）、アッシリアの州の数はバビロニア（メソポタミア南部）を含めて 85 にのぼる（Radner 2006, 66）。しかし前 672 年当時のアッシリアは本国の中心部を含めて 71 の州に分割され（図版 5a, 5b; Radner 2006）、それぞれに代官が配置されていた。タイナ



図版 4a：テル・タイナト中央の「古い神殿」遺構。
9×21m。 <https://tayinat.artsci.utoronto.ca/wp-content/uploads/2018/12/about25.jpg>



図版 4b：テル・タイナトの「古い神殿」内外で出土した物の場所。ESODのタイナト版 (Tablet T-1801) は神殿最奥で発見された。Harrison/ Osborne 2012, 138.



Karte 3
Die ass. Provinzen im Nordwesten des Reiches (Zeichnung: C. Wolff).
12 Provinz des *turtānu*, 13 Provinz des *turtānu šumēlu*, 18 Amedi, 20 Guzána, 23 Našibina, Raqamātu, 25 Rasappa, 28 Tušhan, 32 Harrān, 34 Laqē, 39 Til-Barsip, 46 Arpadda, 49 Gargamis, 50 Hatarikka, 51 Haurina, 52 Kullania, 54 Mansuāte, 55 Marqāsu, 57 Que, 58 Sam'alla, 60 Simirra, 62 Tabal, 63 Tu'ammu, 66 Uppumu.

図版 5a: アッシリア西部の州。「52」の番号が振られた州の首都が現代のテル・タイナト (古代名クラニア、クナリア、キヌルアほか)。Radner 2006, 59.



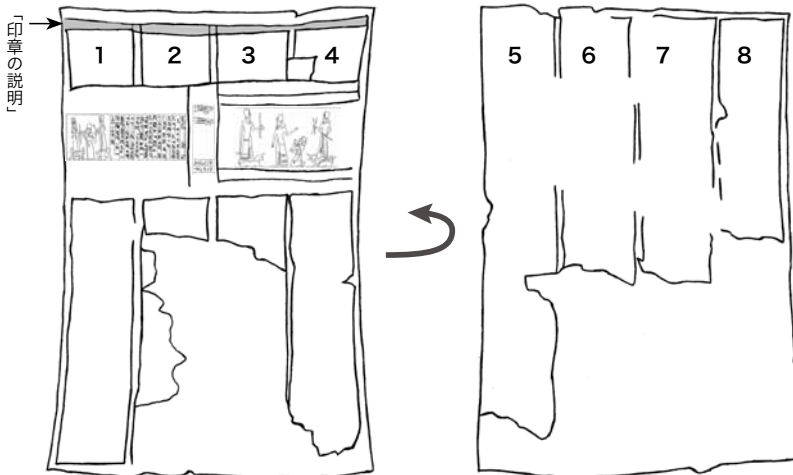
Karte 4
Die ass. Provinzen im Südwesten des Reiches (Zeichnung: C. Wolff).
40 Ak-šunu, 43 Dindāpa, 44 Haur-šikka, 45 Haur-šim, 46 Kullania, 47 Karmadū, 48 Mansuāte, 49 Qanina, 53 Samirra, 54 Šimarra, 59 Šubara, 63 Tūšhan, 65 Šikkānu.

図版 5b: アッシリアの地中海沿岸部の州。「47」番のアシドドと「59」番のサマリアの南が、アッシリアの州になっていないユダ王国。Radner 2006, 60.

ト版に代官の個人名はなく、職名とその配下に置かれた16の職名が記されているのは、任期によって代官が交替したためである。また代官には宦官が多かったこともあり、ニムルド版の場合のように誓約者の「息子たち、孫たち」には言及されていない(渡辺 2017, 197 参照)。⁷⁾

I.2. 表面と裏面の書字方向が同じ

楔形文字文書は基本的に、本書のように横書きで左から右に読む。そして両面に文字が書かれた粘土板文書では、表面の文を読んでから、粘土板文書を垂直方向に回転させて裏面の文を読む。ところがESODだけは表面を読んだ後、上下方向を逆にすることなく、本の頁のように裏面を読むことができる (Watanabe 1988)。ワイズマンはその理由を、粘土板が大きいためとしたが (Wiseman 1958, 14 と n.140)、それだけではないと思われる。筆者が大英博物館所蔵のESODの粘土板を計測したかぎりでは、厚さは4.4 cmから5.7 cmの間であった (Watanabe 1987, 52)。それほどの厚さは石碑のように立てて置くことが期待されたためと筆者は考える (図版6; Watanabe 1988 参照)。堆積平野のメソポタミアで石材は得にくく貴重であるのに対して、粘土はほぼ無尽蔵である。ESODのように大量生産される巨大文書には粘土の方が適しているが、それ以上に印



図版6: ESODの粘土板は例外的に表面(左)と裏面(右)の書字方向が同じ。表面にある4欄を読み、その続きは裏面に回って8欄まで読む。3つの印影は左から印章A、B、Cによる。印章B(古アッシリア時代のもの)だけは垂直方向に印影が押されている。それによって2行の印章銘文は上下方向が逆になっている。渡辺2017、11参照。

章を押す原本であるからこそ粘土板である必要があった。

I.3. 粘土板文書の分類とアッシリア語

粘土板文書の分類法はいくつかあり得るが、A. オッペンハイムは内容と機能の観点から次の2つのグループに分けた。第1グループは書庫で長期に保存される伝統的、文学的テキストであり、熟練した書記によって書かれるもの。第2グループは日常的な活動の記録であり、膨大な数がある (Oppenheim 1977 [1964], 13)。しかし実際はそれぞれに多様性がある。

第1グループの文書は、「文学」用のアッカド語 (前1500年頃以後であれば「標準バビロニア語」。表参照) で書かれる文書であり、書庫に収められるべき神話、文学のほか、メソポタミアのシャーマンに相当するアーシプ (渡辺 2018 参照) とその周辺の職能集団だけが閲覧を許される宗教文書、儀礼の式次第、占い文書などがある。文学的な歴史記述といえる王碑文もこのグループに含まれる。また宮殿壁面や石碑に刻まれる王碑文は衆目に触れることを想定している。

第2グループには、長期保存用でない債務証書など、一定期間が過ぎれば不要となり、廃棄される文書が属する。書簡など狭い範囲の人々だけが見るものもある。行政書簡や王の書簡などは、写しが取られて保管されるが、用途と内容の違いからも第1のグループには属さない。使用言語は時代と地域によって異なる「現地の」アッカド語方言である (表参照)。

この分類法によると ESOD は、前7世紀当時のアッシリアの法的文書の形式に従って冒頭で誰の印章かが説明され、続いて印影があるという、第2グループの文書である。使用言語は、筆者の計算では81%は新アッシリア語、残りの19%は、主にバビロニア由来の呪いの言葉を記すために使われた標準バビロニア語である。

アッシリア語とバビロニア語の間では語彙や動詞の活用が少々異なる

[アッカド語方言の表]

アッシリア (北部メソポタミア)	(中央)メソポタミア	バビロニア (南部メソポタミア)
	古アッカド語 前 2500–1950 年頃	
古アッシリア語 前 2000–1500 年頃		古バビロニア語 前 1950–1530 年頃
中期アッシリア語 前 1500–1000 年頃	標準バビロニア語 前 1500 年頃 – 紀元頃	中期バビロニア語 前 1530–1000 年頃
新アッシリア語 前 1000–600 年頃		新バビロニア語 前 1000–625 年頃
		後期バビロニア語 前 625 年頃 – 紀元頃

アッカド語と総称される東セム語の時代と地方による方言の違い。Caplice 2002, 3 を参考に渡辺作成。「標準バビロニア語」は北部と南部の双方で第 1 グループの文書に用いられた。

(Luukko 2004 参照) が、極端に異なるのは動詞の接続法である。バビロニア語では語尾に *-u* がつくが、そこに人称語尾など他の語尾が加わると、それらに吸収されて見えなくなる。他方、アッシリア語の接続法は語尾に *-ni* がつく (von Soden 1995, §83d) が、他の語尾がいくつついても *-ni* は消えることなく常に最後の語尾として残る。この事実のごく少数の専門家にしか知られていなかった。しかしその少数者であるワイズマン (Wiseman 1958a) は条件節のなかの接続法を「誓いの表現」に属するとする伝統的な文法書に従う訳し方を選び、同じく少数者のパルポラはほぼワイズマンに従って訳した (Parpola/ Watanabe 1988, 28–58)。

従来文法書では、条件節における動詞は直説法とされてきた (von Soden 1995, §161a) が、ESOD で頻出する、条件節における接続法の用法は「不明である」(von Soden 1995, §83f) としか記載がなく、筆者が解明に取り組むことになった。その結論は、条件節における動詞の接続法は「もし万が一にも…が…するならば／しないならば」のように話者の観点からあつてはならない条件を提示する際に用いられるというものである。詳しくは Watanabe 1987, 27–30; 渡辺 2017, 17–22 参照。⁸⁾

このように ESOD は第 2 グループに属する証書であるが、後述するよ

うに神格化され、永遠に有効とされたことから、第1グループの文書に属するともいえる。これまでも文書の神格化とみなし得る例として、たとえば古くなった定礎碑文に（保存修復作業を兼ねて）油を塗り、犠牲をささげて元の位置に戻すことを要求する前19世紀の王碑文が知られている（Grayson 1987, 50）。しかしESODの神格化については「神アッシュルの越境」と併せて考察する必要がある。

II. 神アッシュルの越境——法的行為者として

実際の法的文書においても神が法的行為者として振る舞う事例は知られていた。法的文書（第2グループの文書）の証人として神の名が挙げられている実例がある（古バビロニア時代の例については Dekiere 1994–1997 参照）。また「誓約」や「証言」では神々に誓いを立てることになるため、神々は証人たちである。もっとも誓約が法と宗教が交差する領域に位置することは現在でも変わっていない（渡辺 1992, 110 参照）。

ESODでは、前述したようにエサルハドンによる王位継承の決定を守るという誓いがすべての神々に対してなされている（ESOD §3）。これらの神々は誓約を破った者に制裁を加えることになるのであり、ESODのなかに多くの行数を費やして書かれている「呪いの言葉」にある不幸な状態を誓約違反者にもたらず責任を負うことを約束したことになる。本来であれば第2グループの文書では、名を挙げられたすべての証人が印章を押すことになっているが、ESODでは、神アッシュルだけが印章を押している。これは次に述べるように、ESODが通常の証書の枠を越え出ているからと考えられる。

II.1. 神話の「天命の書板」から現実世界へ

メソポタミア神話のなかでは、最高神が唯一の「天命の書板」(*tuppi*)

šimti, 文字通りには、「確定されたことの書板」)に自らの印章を押すとされていた。その書板にはすべての神々と人々の定め(たとえば人間については寿命の長さ)が書かれているとされる。

『アンズー神話』では、最高神の権能は、「天命の書板」を保持することによって保証されるようである。怪鳥アンズーが野心をおこして最高神エンリルから「天命の書板」を奪うと、アンズーが不思議な力を行使できるようになった(渡辺 2020、201 参照)が、他の神によって討伐された。少し後の創世神話『エヌマ・エリシュ』(第4書板 121–122 行)のなかでも、バビロニアの最高神マルドゥクはキングに奪われていた「天命の書板」を取り戻し、それを胸に付けたとされる(渡辺 1992、87)。

ESOD の粘土板は、神の印章が実際に押された粘土板として知られる初めての例であったが、筆者が取り上げるまで論議の対象にならなかった。神話の出来事が現実世界で実践されることをどう論じるべきかは難しい問題であるが、その背後にあるものを丁寧に考察するほかはない。いわゆる「神話と儀礼」学派であれば解釈できるということではない。

ESOD の文書の名前は「アデー」(*adē*)であり、「天命の書板」ではない。新アッシリア時代の「アデー」と呼ばれる、これまでに知られている 14 の文書 (Parpola/ Watanabe 1988) と、「アデー」の語が使われているすべての箇所と用法 (Watanabe 1987, 6–23) から、その意味は「誓約によって確定された取り決め」のような意味であり、政治的な文脈で用いられていた。しかし時代順に並べられた 14 のアデー文書のうち、6 番目にあたる ESOD が唯一、印影がある原本であるが、他の 13 の文書に印影はなく、原本の写しか下書きのようなものである。またそれぞれの取り決めの内容が異なるため、アデーの内容と形式を一般化することはできない。

II.2. 神アッシュルの 3 つの印章

ESOD の粘土板に神アッシュルの印章が押してあることは、冒頭に

「神々の王、国々の王であるアッシュルも変更を許さない印章。大いなる君主、神々の父（であるアッシュル）の異議申し立てを許さない印章」（図版6参照。構成要素「印章の説明」。II.3.参照）と宣言されていることから明らかである。実際に粘土板表面の上部に次のような神アッシュルの、時代が異なる3つの印章による印影がある。

II.2.1. 新アッシリア時代の印章（印章A、図版7）

3つの印影は印章A、B、Cによる（図版6参照）。前7世紀の印章Aの図像は左から、神アッシュル、何かをもって鼻に近づける「アパ・ラバーヌ」の仕草で礼拝するアッシリア王センナケリブ、女神ムリスである。

印章銘文は16行あり、次のように読める。

「¹⁻⁵ 神々の王であるアッシュルが、天と地の神々であるイギギとアヌナキの天命と、人間の天命（の書板）に押印するための天命の印章。⁶⁻¹⁰ すべて（アッシュルがこの印章によって）押印することは変更してはならない。それを変更する者を、神々の王であるアッシュルと（その配偶）女神ムリスが、彼らの息子たち（である神々と）ともに、彼らの強力な武器によって打ち殺すように。¹¹⁻¹² [アッシリア]の王である私、センナケリブはあなたを畏怖する君主である。¹³⁻¹⁶ 記された私の名を消す者、あなたのこの天命の印章を紛失させる者（があればその者）の名と子孫を国から消し去りたまえ」（〔 〕内は補完された欠損部分。（ ）内は理解を助ける付言。下線渡辺。渡辺 1992b, 88 参照。）。

エサルハドンの父センナケリブ（在位前704–681年）が神アッシュルに献じた「天命の印章」と書いてあり（後述のIV.参照）、実際に「天命の書板」に押す以外の使用法はないはずである。センナケリブが宗教改革を行ったことは広く知られている。前述したように神話『エヌマ・エリシュ』では当時のバビロニアの神マルドゥク（元来は都市バビロンの守護神）が、「天命の書板」に印章を押すという最高神の役割を演じているが、



図版7：新アッシリア時代の王センナケリブが神アッシュルに献じた「天命の印章」（印章A）の印影（再構成）。印章図像は中央のセンナケリブが神アッシュル（左）とその配偶女神ムリスを礼拝している場面としての「礼拝図」。高さ5.5 cm。渡辺2017, 44 参照。

うに、センナケリブは、マルドゥクではなくアッシリアの最高神アッシュルこそ、「天命の書板」に印章を押すことを明確に示そうとした。それはセンナケリブがバビロニアの首都バビロンを征服、破壊し、神マルドゥクの像を捕虜としてアッシリアに「連行」した実績に支えられていた。

「天命の印章」としての印章Aは、神アッシュルが用いる「天命の印章」でありながら、その印章銘文はセンナケリブ自身の信仰深さを訴え、神アッシュルからの恩恵を得ようとする奉納文となっている。従ってその印章も彼の奉納物とみなすことができる（渡辺2020、202–204 参照）。印章図像のなかでセンナケリブが礼拝する姿は、宗教改革の一環として取り入れたバビロニアの礼拝のしぐさ「アパ・ラバーヌ」（「鼻を平らにする」）であり、それは印章銘文にある「私、センナケリブはあなたを畏怖する君主（*rubê pāliḫika*）である」と呼応する。

センナケリブが自らの「宗教改革」のなかで実際に「天命の印章」を作らせて神アッシュルに献じたことは、ESODの印影によって初めて明らかになった。筆者がそれを指摘すると（Watanabe 1985）、A. ジョージは、センナケリブが「天命の書板」も献じた可能性を指摘した（George 1986）。おそらく神アッシュルが「天命の書板」に印章を押す儀礼が実際に行われたのであろう（渡辺1992、88–90 参照）。しかしこれを「神話

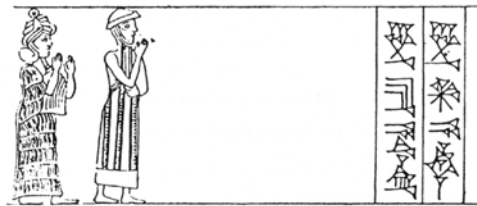
のドラマ化」として一般化するのではなく、アッシリアの伝統のなかに位置づけて考察する必要がある。

II.2.2. 古アッシリア時代の印章（印章 B、図版 8）

前 20–19 世紀頃の印章 B の図像は左から、とりなしの女神、礼拝者としての施政者である。再利用の印章であり、もとの神像は削られたが、新たに神像ではなく、銘文「神アッシュルのもの。市役所（ビート・アーリム）のもの」が刻まれた。土地アッシュルの神格化である神アッシュルの像の形状が、当時はまだ確定していなかった。この「礼拝図」では「神アッシュル」を含む銘文が礼拝対象とも考えられる。

この印章 B も「天命（の書板）」と無関係ではない（George 1986）。「町」とはアッシュル市を指すが、古くからアッシュルと呼ばれていた土地が神格化されて神アッシュルとなったため、前 2000 年頃に独立した都市国家としてのアッシュル市も神格化されていた。「町の家」、すなわち「神であるアッシュル市の神殿かつ役所」こそ最高神アッシュルが「天命の書板」に押印する場所であった。現代の研究者が「神々の住所録」（Götteradressbuch）と呼ぶ文書によれば、「市役所＝町の家／神殿」の別名は「秘密の天命が（書かれた）書板に印章が押される神殿」である（Menzel 1981, II, 64, T 158, 159 行; Parpola 2017, 136 参照⁹⁾）。そこから、アッシリアでは前 2 千年紀初頭の都市国家の時代から神アッシュルに「天命の書板」とともに「天命の印章」を、王に相当する都市国家アッ

図版 8：古アッシリア時代の印章（B）。再利用の印章であり、中央の空白部分にはメソポタミア南部由来の神像があったが削り取られている。神アッシュルの像が刻まれるべきであるが、当時はその形状が決まっていなかった。しかし「神アッシュル」の語を含む銘文が神アッシュルの像の代わりとされた可能性もある。高さ 3.4 cm。渡辺 2017、46 参照。



シュルの施政者が献じたこと、そしてそれがアッシリアの伝統として根付いていった可能性がある」と筆者は考える。また印章 B は約 1300 年間保存されてきてエサルハドンによって前 7 世紀に使用されたという、最長の保存歴を示すが、このような点も宗教都市アッシュルの例外的な持続性と無関係ではない (Postgate 2011 参照)。

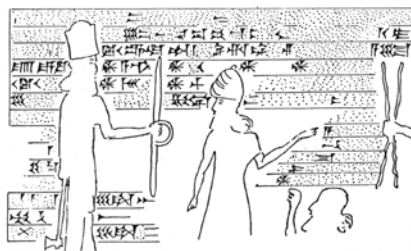
II.2.3. 中期アッシリア時代の印章 (印章 C、図版 9a, 9b)

前 13 世紀の印章 C の図像はほぼ完全に再構成できるが (図版 9a)、銘文は再構成によっても判読できない (図版 9b)。図像は左から、神アッシュル、とりなしの男神 (神ヌスクか)、跪いて礼拝するアッシリア王 (トゥクルティ・ニヌルタ 1 世か)、天候神アダドである。

この印章銘文が明瞭に再構成できないこともあり、ワイズマンはこれを中期アッシリア時代のトゥクルティ・ニヌルタ 1 世 (在位前 1243–1207 年) の王の印章と推測した。しかし筆者はこの印章こそ、後述 (IV) するように彼が取り組んだ宗教改革において、神アッシュルに献じた「天命



の印章」であると推測する。そしてトゥクルティ・ニヌルタ 1 世が後のセンナケリブに与えた影響は小さくなかったはずである。



図版 9a：中期アッシリア時代の印章 (C) の印影図像 (再構成)。左から：神アッシュル (神人同形的な像として表された最初の例)、とりなす神 (おそらく神ヌスク)、跪いて祈る礼拝者 (おそらくトゥクルティ・ニヌルタ 1 世)、天候神アダド。高さ 7 cm。

図版 9b：中期アッシリア時代の印章 (C) の印章銘文 (再構成)。渡辺 2017、42 参照。

II.3. エサルハドンの宗教改革における越境

メソポタミアの神話伝統によれば、最高神が「天命の書板」に印章を押すことによって天命が決定されるが、エサルハドンが現実世界で進めた宗教改革では、もはや「天命の書板」は最高神が保持すべき1部だけではなくなくなっていた。

センナケリブは前689年にバビロニアに攻め込み、首都バビロンを破壊し、さらにバビロニアの当時の最高神であったマルドゥクの像を「連行」した。しかしエサルハドンはそれを行き過ぎと判断したようであり、バビロニアとの関係を修復し、奪い取った他の神像とともにマルドゥク像も返還することを決めていた（たとえば Leichty 2011, 105 参照）。エサルハドンはアッシリア王とバビロニア王を兼ねていたが、ESOD に込めた大きな政治的目的の一つは、バビロニアに対する単なる宥和政策ではなく、次のアッシリア王アッシュルバニパルの勢力下に、シャマシュ・シュム・ウキンのバビロニア傀儡政権を置くものであったと筆者は考える（Watanabe 2014, 165）。ESOD 本文では、シャマシュ・シュム・ウキンは実質的には1回（ESOD 86行）しか言及されず、アッシュルバニパルの権力保全を図る意図が強く出ていることから推定できる。

未曾有の大帝国となりつつあったアッシリアの支配下に置かれた多様な人々にも理解してもらえる文書の作成が必要であるだけでなく、エサルハドンの死の直後、軍事力を指揮する権力者がいないときに、どのような権威が大帝国の人々を王位継承の定めに従わせることを可能にするかが問題であった。エサルハドン（とその宮廷）が出した答えは「天命の書板の〈グローバル化〉としてのアデー文書」の広域配布であったと思われる。

センナケリブの時代までは、「天命の書板」は最高神が保持する1部だけであった。しかしエサルハドンはESODを世界初のマス・メディアとして大量生産させ、しかもすべてが最高神の印章が押された「天命の書

板」の原本とした。それはエサルハドンの、大きく一步を踏み出した宗教改革として、誓約者各人の「天命」が記され、アッシュルが押印した「天命の書板」の〈進化形〉を支配下の全地に行きわたらせるものであった。

III. 誓約文書の永遠性と「礼拝図」

タイナト版の発見と公刊によってテキストが補完されたことから、筆者は ESOD を構成する要素の 9 つを次のように抽出し、すべての行 (692+ α 行) をその 9 つに分けた (Watanabe 2015; 渡辺 2017, 15–17)。

- (1) 印章の説明 (1 箇所) (2) 表題 (2 箇所) (3) 命令 (2 箇所)
- (4) 制定事項 (5 箇所) (5) 条件節 (36 箇所) —「プロタシス」(protasis)
- (6) 関係節 (1 箇所) (7) 帰結文 (29 箇所) —「アポドシス」(apodosis)
- (8) 第 1 人称の誓約 (1 箇所) (9) 奥付 (1 箇所)

III.1. 「未来永劫、アッシュルはあなた方の神」

ESOD から読み取れるエサルハドンによる宗教改革の、また別の新しさは、神アッシュルを「あなた方の神」と宣言し、神アッシュルの印章が押してある ESOD の粘土板文書を、その押印を根拠にして「あなた方の神のごとくに守る」ことを要求したことである。なお上記の構成要素の「(4) 制定事項」は 5 箇所に分けて書かれているが、ESOD のなかでの根幹部分であり、誓約の対象となる内容を示している。制定事項の 5 箇所目に当たるのが ESOD §34b (§34 の後半) であり、次のように読める (渡辺 2017, 222–223 参照)。

§34b: 393–396 (制定事項⑤)

³⁹³ これから後、未来永劫、アッシュルはあなた方の神であり

(*Aššur ilkunu*)、³⁹⁴ 大皇太子アッシュルバニパルはあなた方の主人 (*bēlkunu*) である。³⁹⁵ あなた方の息子たちと孫たちは ³⁹⁶ 彼 (= アッシュルバニパル) の息子たちを畏れ敬うように (下線渡辺。渡辺 2017、223 参照)¹⁰⁾。

この部分のアッカド語の読み下し文 (transcription) は注 10) 参照。この箇所では重要なことは、ESOD の誓いが未来永劫有効であり、更新の必要がないということである。神アッシュルは永久に「あなた方の神」となること、「そして大皇太子」とされているアッシュルバニパルとその子孫が永久に「あなた方の主人」となることが宣言されている。

III.2. 神アッシュルが押印した書板を「あなた方の神」のごとく守る

§34b に続く §35 (397–409 行) は、ニムルド版では十分に復元されなかったが、タイナト版によって明確になった。この箇所は ESOD で唯一の要素「(6) 関係節」であり、「(誓約に違反) する者は」という内容をもつが、ここでは後半部分を引用する。読み下し文は注 11) 参照。

§35: 397–409 の後半 (405–409 行)

405–407 (あなた方のうちの誰でも、) あなた方の主人であるアッシリア王エサルハドンの息子、大皇太子アッシュルバニパルの (に関する) 誓約がそこに書いてある、この偉大な君主 (=アッシュル) の印章 (が押された書板)、神々の王であるアッシュルの印章が⁴⁰⁸ 押されている、あなた方の前に置かれた (この書板を)⁴⁰⁹ あなた方の神のごとく (*kī ilikunu*) 守らないならば (第 2 人称、現在形、アッシリア語の接続法) (下線渡辺。渡辺 2017、223 参照)¹¹⁾。

上記のように、§34 の「制定事項⑤」では、アッシュルはあなた方の神

と宣言され、次の §35 の「関係節①」では、神アッシュルの印章が押された書板をあなた方の神のごとく守らないならば、(呪われる)と言われていることになる。ここでは「印章」(*kunukku*)の語が、「印章が押された書板(証書)」の意味で用いられるが、これは特異なことではない。「あなた方の神」という宣言は、すべての人々がすでに神信仰を実践していることを前提とし、それに加えて神アッシュルも「あなた方の神」になることであり、排他的なアッシュル信仰の強要ではない。

ESOD では構成要素の「(5) 条件節」においてどのような事柄が誓約違反に相当するかを「もしあなた方が…するならば(接続法)」という条件節を何重にも重ねて説明し、それらに続く構成要素の「(7) 帰結節」において、誓約違反に対する見返りとしての不幸や破滅的な状況がもたらされるようにという祈り(不幸を願う呪い)の言葉が重ねられている。そのため構成要素「(6) 関係節」は本来不要である。しかしバビロニア語の文書では関係節「…する者は」という3人称の表現に続いて「神○○が(不幸な状況を)もたらすように」という願いが置かれるために、「(6) 関係節」の前半(397–404行)にはバビロニア語の語彙と表現を取り入れている。ところがここで引用した後半(405–409行)になるとアッシリア語になり、人称も基調としての第2人称に戻っている。

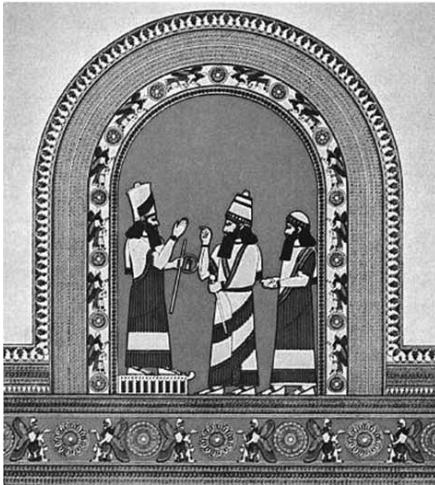
III.3. 粘土板文書としての神と「礼拝図」

タイナト版の発見は、「あなた方の神のごとく守る」ことの実践例が初めて示されることになるが、それは、アッシリアの代官が任地クナリアにある古い神殿の最奥に祀る(安置する)というものであった。発見の状況から、書板の両側面中央に穴をあけてそこに鎖状のものを通して固定していたと推定できる。

しかし、たとえ近隣に神殿がない場合でも、新たにアッシュル神殿を建立する必要はなく、すでに実践している神信仰に応じた「神像」として

の扱いをすればよいわけである。ESODの3つの印影も神像とその礼拝者の像を組み合わせた礼拝図を示すが、この図は高さ数センチの円筒印章の側面にも頻繁に見られる。印章は首からかけて携帯し、本来の用法として証書に押すだけでなく、携帯できる神殿であり、なおかつ護符でもあった。また証書に印章を押すたびに、神像と礼拝者としてあらわされた自らの祈る姿、さらに銘文があれば、神への祈りが再生産されることにもなった（渡辺 2020）。メソポタミア文明の初期から施政者による神殿の建立、神像や自らの礼拝者像の神殿への奉納が行われてきたが、時代が進むとともに、「礼拝図」を彫った印章を個々人がもつことによって、祈りの表現としての奉納がより多くの人のものになったと考えられる。

新アッシリア時代の王は人目につく岩壁や宮殿壁面に神々を礼拝する自らの像を彫らせたり（図版 10 参照）、また石碑に礼拝図とともに自らの事績を記した王碑文を刻んで各地に立てた。そのような石碑や岩壁も神殿



として機能したといえる。

前述したように ESOD の 3 つの印影はそれぞれ礼拝図を示す。最古の古アッシリア時代（前 20–19 世紀）の印章 B（図版 8）には、とりなしの女神と礼拝者、そしてアッシュル像はないが、「神アッシュル」の語を含む銘文はある。中期アッシリア時代の印章 C（図版 9a,

図版 10: アッシリア王サルゴン 2 世（在位前 721-705 年）のドゥル・シャルキーン（コルサバード）出土宮殿内の彩色が残る壁画の再現模写（部分）。神アッシュル（左）を礼拝するサルゴン 2 世（中央）と高官（右）の要素から成る礼拝図。王は伝統的な祈りの仕草ウバーナ・タラーツを示す。礼拝図の周囲と下部には浄化儀礼を行う有翼の精霊（「賢者＝アブカル」）がロゼッタ紋を挟んで配されている。後代の「飛天」にも似る構図である。壁画の最上部は床面から 12.8 m。シカゴ大学オリエント研究所博物館。Orthmann 1985, XXII.

9b)では、神アッシュル、とりなしの神、礼拝者、そして神アダド（天候神）の像が彫られている。新アッシリア時代の印章 A（図版 7）では神アッシュル、礼拝者、女神ムリス（その時代の神アッシュルの配偶女神）が彫られている。このような礼拝図が「神殿」を現出させるならば、ESOD の書板を持ち帰った誓約者がどこに置いても、そこがその書板と神アッシュルを礼拝する場所となり得たことになる。

IV. トウクルティ・ニヌルタ 1 世とセンナケリブ

「はじめに」で述べたように ESOD のニムルド版はワイズマン（生没 1918–2010 年）によって『エサルハドン宗主権条約』として出版された（Wiseman 1958a）。ここでは 2010 年に 91 歳で亡くなったワイズマンの業績（ワイズマンの「死亡者略歴」（obituary）については、たとえば George 2010 参照）を検討しつつ、アッシリアの伝統の再考を試みたい。

IV.1. 中期アッシリア時代の印章 C について

ニムルド版が発見される 1 年前に G. E. メンデンホール（Mendenhall 1954）が、法制史学者の V. コロシェツ（Korošec 1931）が提示した、前 13 世紀頃の「ヒッタイト宗主権条約」の形式を示して、「モーセの契約」（『出エジプト記』19–24 章）と「ヨシュアの契約」（『ヨシュア記』24 章）がその宗主権条約の形式を踏まえているという仮説は大きな注目を集めた。ワイズマンはすでにコロシェツの学説を知っていたはずであり、決してメンデンホールの説に影響されて ESOD を「ヒッタイト宗主権条約」の形式を持つと主張したわけではない。しかし当時注目を集めていたその説が、聖書の契約形式（とモーセの活動）を前 13 世紀に引き寄せるのに対して、ワイズマンはその契約形式が前 7 世紀まで続いてきたと主張し学界を驚かせたが、それには多くの曲解が前提となっていた。

ワイズマンは「印章の説明」も、印章 A (図版 7) と印章 B (図版 8) の印章銘文も正しく読んでいるため (Wiseman 1958a, 14–19)、神のアッシュルの印章が押印されていることを認識しているはずである。ところが印章 C (図版 9a, 9b) については「王の印章」とした。その根拠として 1 つのニネヴェ出土の粘土板文書 (図版 11; K 2673; Wiseman 1958a, Plate VIII, 2) を引き合いに出す。それは確かにワイズマンが言うように「トゥクルティ・ニヌルタ 1 世の印章のセンナケリブによる発見」について書かれているが、次のように読める (太い横線はこの粘土板文書にある、文書の区切りを示す)。



図版 11 : センナケリブが発見した印章に関する粘土板文書。表面 (左) と裏面 (右)。
大英博物館。Iraq 20, Plate VIII-2 (K 2673)

- 表面
- 1 トゥクルティ・ニヌルタ (1 世)、全世界の王、アッシリア王サルマヌ・アシャレドの息子。
 - 2 カラドゥ〈ンヤシュ〉 (=バビロニア) の戦利品。私の文字 (と) 私の名前を変更する者 (があれば)、その者の名前 (と) 国を
 - 3 (神) アッシュルとアダドが滅ぼすように。
 - 4 この印章はアッシリアからアッカド (=バビロニア) に贈答品として与えられていた。
 - 5 私、アッシリア王であるセンナケリブは
 - 6 600 年後にバビロンを征服した。
 - 7 そしてバビロンの財産からこれ (印章) をもたらした。

- 底面 8 (古い書体で) 全世界の王、シャガラクティ・シュリヤシュの財産。
- 裏面 (9-11 = 1-3) ⁹ トゥクルティ・ニヌルタ (1世)、全世界の王、アッシリア王サルマヌ・アシャレドの息子。
¹⁰ カラドウンヤシュ (=バビロニア) の戦利品。私の文字 (と) 私の名前を変更する者 (があれば)、その者の名前 (と) 国を
¹¹ (神) アッシュルとアダドが滅ぼすように。
 (12 = 8) ¹² (古い書体で) 全世界の王、シャガラクティ・シュリヤシュの財産。
- ¹³ 当該のラピスラズリの印章に (ある銘文と付加すべき銘文)。
 (下線渡辺。Watanabe 1985, 386; King 1904, 106-109; Grayson 1987, 280-281; Grayson/ Novotny 2014, 215-217 参照)¹²⁾

この文書から読み取れることを時系列を追って記すと次のようになる。

- (1) 〈8 = 12 行〉ラピスラズリの印章にカッシート王朝時代のバビロニア王「シャガラクティ・シュリヤシュの財産」と刻まれていた。
- (2) 〈1-3 = 9-11 行〉バビロニアに攻め込んだトゥクルティ・ニヌルタ 1 世 (在位前 1243-1207 年) がこれを戦利品として持ち帰り、第 1-3 行 (= 9-11 行) にある文言を刻ませた。
- (3) 〈4 行〉その後のある時、この印章が「アッシリアからバビロニアに贈答品として与えられた」(実際のところは、戦利品としてバビロニアに奪い返されていたかもしれない)。
- (4) 〈5-7 行〉「600 年後に」(これは誇張であり、実際には前 689 年に) バビロニアの首都バビロンに攻め込んだセンナケリブが、この印章をバビロンの財産のなかに見つけ、再びアッシリアへもたらして新たな銘文 4-7 行を加えさせたことになる。なお、この時系列はすでに L. W. キングが読みとっていた (King 1904, 60-76)。

この粘土板文書は第 13 行（奥付）にあるように、センナケリブの指示によって、すでにあつたトゥクルティ・ニヌルタ 1 世による第 1-3 行と、最初の持ち主であるバビロニアのカッシート王朝のシャガラクティ・シュリヤシュ（在位前 1245-1233 年）による第 8 行（カッシート王朝特有の復古的書体で書かれる）の間に、新たに第 4-7 行を刻むことを職人に伝える粘土板文書である。これはニネヴェ出土の大英博物館所蔵の文書であるが、当該の印章は見つかっていない。

ワイズマンは、キングによる時系列の解釈も知っていたはずでありながら（Wiseman 1958, 21, fn. 185）、この粘土板文書で言われている印章こそ、ESOD に押された中期アッシリア時代の印章 C であるとし、さらにこれが（神ではなく）王（トゥクルティ・ニヌルタ 1 世）の印章であると主張した（ワイズマンはついでに印章 A と B も王の印章とした。Wiseman 1958, 22）。しかし最初の持ち主から判断すると、カッシート王朝期独特の図像があつたはずであり、中期アッシリア時代の図像を示す印章 C と同一ではありえない。たとえ元の図像を削り取って、新しい図像を掘りなおしたとしても、印章 C の印影に残っている文字だけ（図版 9b）でも、この粘土板 K 2673 が伝えるラピスラズリの印章にあるべき文字とは異なっている。それだけでなくこの粘土板は、元あつた銘文をそのまま残したことをも伝えている（Watanabe 1985, 385-387 参照）。

IV.2. 誓約形式の伝統と越境

「ヒッタイト宗主権条約」には王の印章が押されているという想定は現在では確かなものではない。筆者はヒッタイトの印章図像の分析から、いわゆる「抱擁印章」（印章図像として、神が王を片腕で抱える様子が刻まれたもの）は「神の印章」であり得ると考えている（渡辺 1992, 101-103 参照）。現在のシリアに位置するカデシュ（オロンテス河岸）でエジプト軍とヒッタイト軍が戦った後、前 1269 年に、エジプトのラムセス 2

世とヒッタイトのハトウシリ 3 世の間に結ばれた、いわゆる「ヒッタイト＝エジプト平和条約」(Edel 1997 参照) がエジプト語版と(当時の古代オリエントでの共通語であった) アッカド語(のうちのバビロニア語)版によって知られている。エジプト語版では原本の「銀の書板」の中央に押されていたヒッタイトの天候神(表面)と太陽女神(裏面)の印章印影の説明があり、それが「抱擁印章」であることがわかる(Watanabe 1989; Edel 1997, 82–83 参照)。銀の書板に印章を押すことは、その部分を一時的に熱することによって可能になると考えられる。ヒッタイトの「条約」についても、より古くからあるメソポタミアの伝統に照らして再検討することが必要である。一般的には、政治的な「条約」には王の権威で十分と考えられがちであるが、誓約とそれに付随する儀礼が行われる限り、必ず「神の権威」が引き合いに出される。「ヒッタイト＝エジプト平和条約」は 1931 年当時コロシェツが「対等条約」とみなした唯一のものであるが(Korošec 1931)、両者の関係が対等であればなおのこと、どちらの王の権威でも不十分である。

そして粘土板文書(K 2673、図版 11)から読み取るべきは、トゥクルティ・ニヌルタ 1 世とセンナケリブによってつなげられたアッシリアの伝統である。両者ともバビロニア征服に成功し、神アッシュルの地位を高める宗教改革を行っている。センナケリブはラピスラズリの印章にトゥクルティ・ニヌルタ 1 世と自らの名と共に残そうとしたのであろう。

IV.3. 「神ヌスクの台座」と「天命の書板」の大きさ

トゥクルティ・ニヌルタ 1 世が神アッシュルに奉納したと考えられる台座(図版 12)の正面に、彼自身が立ったり跪いたりしながら礼拝している姿が彫られ、「異時同図」の例としてよく示されるが、注目すべきは礼拝対象の粘土板文書である。これは通説のように書記の神ナブーのシンボルではなく、神アッシュルの「天命の書板」であり、神アッシュルのシ

ンボルでもあると筆者は考える。この台座の基底部に次の銘文がある。

神ヌスクの台座 (*nēmedu*)。(神ヌスクは) エクル神殿の大臣 (*sukkalmahḫu*)、正義の尺を持つ者、アッシュル=エンリルの前に仕える者 (*muzziz pān aššur u enlil*) である。彼 (ヌスク) は、その愛する王トゥクルティ・ニヌルタ (1 世) の祈りを神アッシュル=エンリルの前で日々繰り返す。エクルにおける彼の権勢の天命が […]。私の主であるアッシュルが永遠に… (欠損) (Grayson 1987, 279–280; Watanabe 2020, 81–84; 渡辺 2020, 205–208 参照)

これはトゥクルティ・ニヌルタ 1 世が企てた宗教改革の一環として作られた台座であり、「ヌスクの台座」という命名は、最高神エンリルに仕える神ヌスクが、エンリルの神殿エクルにいて、誰かの祈りを神エンリルにとりなす (仲介する) 役割を果たすようにこの台座が働くという期待が込められている。グレイソン (Grayson 1987, 279) が考えるように「神ヌスクが腰かける台座」ではない (渡辺 2020 参照)。そして「神アッシュル=エンリル」(ここでは「アッシュルとエンリル」と書かれる) という呼び名は、神エンリルこそ神アッシュルであり、エクル神殿はアッシュル=エンリルの神殿とされている。そして最高神だけが保持できる「天命の書板」を作成して神アッシュルに献じ、また



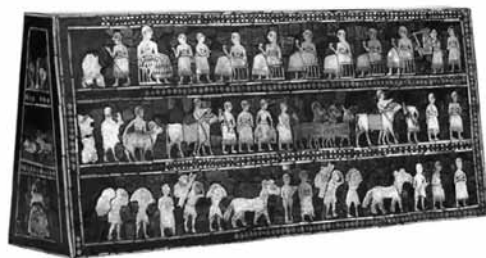
図版 12: 「神ヌスクの台座」という名の台座。神アッシュルを象徴する天命の書板を立ったり跪いたりしながら礼拝するトゥクルティ・ニヌルタ 1 世。前 13 世紀。57.5×57.5×23.5 cm。渡辺 2017, 42 参照。ベルリン国立博物館。

シンボルとし、それを王が礼拝していることが浮彫によって表現されていると考えられる。

筆者がリトンから出版した『エサルハドン王位継承誓約文書』（渡辺2017）の表紙図版を作成してくれた大石昌孝氏から次のような指摘を受けた。それは「ヌスクの台座」（高さ 57.5 cm）の浮彫のなかにある相似形の台座に置かれた粘土板の高さは、その割合から実際には 45 cm 前後になるということであった。この浮彫がその後のアッシリアの王たちに知られていた可能性は高いのであり、前述（I.1.）した ESOD の粘土板文書の「法外な」大きさはこれによって決まったといえるのではないか。

センナケリブはトゥクルティ・ニヌルタ 1 世を手本にする一方で、少なくともトゥクルティ・ニヌルタ 1 世の時代から 500 年以上続いてきたアッシリアの祈りの仕草である右手の人さし指を前に出す「ウバーナ・タラーツ」ではなく、右手に何かを持って鼻に近づけるバビロニアの仕草「アパ・ラバーヌ」を取り入れた（図版 7 参照）。¹³⁾ そしてエサルハドンは宗教改革をさらに進め、大量生産、広域配布した「天命の書板」を「アデー文書」として、バビロニアを含めた各地で礼拝させた。

従来の文献学、特に聖書学では、異なる文書に似た文言や形式があると、その間に直接的な影響を想定しがちであった。しかしメソポタミアの初期王朝（プレサルゴン）時代（特にその第 2-3 期としての前 2700-2350 年頃）から都市国家間の抗争を取束させ、また防ぐ目的での誓約は神々を証人としてなされてきた（たとえば都市国家ラガシュの王エ・アナトゥムが都市国家ウンマに勝利した後の誓約文書（「禿鷲碑文」。Frayne 2008, 126-140 参照）。¹⁴⁾ また通称「ウルのスタンダード」（図版



図版 13：通称「ウルのスタンダード」。竖琴の共鳴箱を飾るラピスラズリ、貝殻、赤色石灰岩の象嵌細工。こちら側に見えるのは「平和」の 3 場面。反対側には「戦争」の 3 場面がある。3 場面は縦×横が 20×47 cm。前 2500 年頃。ウルの王墓から出土。大英博物館蔵。前川 2011、32-33 参照。

13; 前川 2009、196–197; 2011、32–33 参照)) には「戦争」と「平和」の情景があるが、戦争状態を終わらせる「誓約文書」によって「平和」への移行（越境）が実現したはずである。メソポタミアの誓約形式に由来するすべての形式は似ているのであり、またそれゆえに、多くの人々に説得力をもち得た。それでも時には伝統からの越境が試みられてきた。

おわりに

アッシュルという名前の土地が神格化されて生じた神アッシュルは、いわばローカルな神である他の神々とは系譜を異にするが、アッシリアの事実上の唯一神であり、同時に国家神かつ最高神であった。ESOD によってアッシリアの傘下すべての人々とその子孫の神とされたが、その拠り所は、神アッシュルの印章が押されていること、特にその印影としての礼拝図であった。その巨大な粘土板文書は石碑のようであり、神格化されたが、そこには礼拝図を貴ぶメソポタミアの伝統の支えがあった。

ESOD がその後の時代に大きな意味をもち得たことは、文書を神聖視する宗教の出現に見ることができる。前述したようにメソポタミアの伝統の延長線上では、礼拝図はその場に神殿を出現させることができる（渡辺 2020）。しかし「最高神の文書としての誓約書」が、当時のほぼ最大版図に達したアッシリア帝国の支配下に置かれた各地域において礼拝されることは、神の像ではなく誓約文書を礼拝するという、「偶像礼拝」の禁を犯すことのない、一つの新たな宗教形態を生み、それが後の「契約の書」（“Book of Covenant”）を崇める宗教の成立を促進した可能性がある。ESOD の書板の礼拝は、アッシリア本国と南部のバビロニアだけでなく、朝貢していた周辺の国々も含まれる。そのなかには、親アッシリア政策をとっていたマナセ王（在位前 687–642 年）が治めるユダ王国もあり、ESOD の書板がエルサレム神殿に安置されたこともほぼ確実である。

本論は ESOD の越境について論じるものであり、それが越境した先で何をもたらしたかを論じることは本論の課題を越える。しかし ESOD 以後のユダ王国でヨシヤ王（在位前 640–609 年頃）が行った「ヨシヤ改革」の考察に対して多くの示唆を与えてくれる。ヨシヤの治世の後半は、アッシリアが弱体化し、前 612 年には滅亡する。エルサレム神殿で「発見」された「ヤハウエの律法の書」（列王記下 22:8）、または「契約（誓約）の書」（列王記下 23:2）に従って「ヨシヤ改革」が実行されたと想定できるならば、それはかつて ESOD がエルサレム神殿に安置されていたことと無関係ではないはずである。またその後の捕囚を含む歴史も含めて、「契約の書」の内容をないがしろにしたからこそ、その契約違反に対する呪いを現実のなかで受けることになったとする歴史解釈が生み出されたと考えられる。

エサルハドン（の宮廷）は、周辺世界の多様性と伝統を十分に理解した上で、ESOD の本文が要求することへの対応と、その粘土板の扱いを当事者である「あなた方」に委ねた。たとえば自分自身のためであるかのようにアッシュルバニパルのために敵と戦うべきとする（ESOD §30; 渡辺 2017、219）など、個人の倫理観を引き合いに出し、また個別の宗教文化のなかで折り合いをつけることを認めたからこそ、ESOD の受容とさらなる発展を可能にしたとみることができる。

多様な宗教文化に対応することを旨として ESOD に集められた、元来は言語や方言を異にしていた呪いの言葉が、——決して ESOD だけが出典ではないが——『申命記』28 章に見られるように、順序も由来も無視されて自由に取り入れられたことは、結果的にヤハウエの属性の普遍性を高めることになったといえる。それだけでなく、特定の民族や政治的なまとまりを超える個人の倫理を重視する方策が ESOD を通して当時の西アジア全域に広められたことが、やがて民族宗教の枠も越えて世界宗教を成立させる要因を形成することになっていった可能性がある。

注

- 1) ニムルド版は「8部」と誤解されることがあるが、実際には少なくとも9部ある(渡辺2017, 14)。発見時のニムルド発掘責任者のM. E. L. マロワンがすでに9部あると述べ(Mallowan 1958, p.i)、ワイズマン自身もラマタヤに対して発行された粘土板(N27)と、「少なくとも他の8部」(at least eight further copies)の復元作業をしたところ、ほぼ同じ文面であるという(Wiseman 1958a, 2)。ニムルド版は10部以上存在する可能性もある。ニムルド版は「8部」という誤解は、ワイズマンの「少なくとも他の8部」を「(全部で)8部」と読み違えて記したS. パルポラに起因するのであろう(Parpola/Watanabe 1988, pp.XXIX¹-XXXI)。
- 2) 日本語版では新しい概説、総譜翻字と対訳(トランスクリプションと邦訳)にタイナト版のテキストを加えたほか、タイナト版によって完全に解明されたESODの構成と、それに基づく多くの新解釈を加えた。しかしドイツ語版にあるすべての「アデー」の用例を原文とともに示した筆者作成のリスト(Watanabe 1987, 6-25)、女神グラ(医術の女神)に(Watanabe 1987, 35-40)、また配偶女神に呼びかける呪いの伝承史(Watanabe 1987, 41-42)ほか、ESOD各行の注釈、索引、新断片の手写、用語の索引などは日本語版に含まれていない。
- 3) ニムルド版発見以前からアッシュル(現在のイラクのカルアト・シェルカト)でドイツの発掘隊によって発見されたアッシュル版の断片(ベルリン国立博物館所蔵)がワイドナーによって公開されていたが(Weidner 1939-1940)、ワイドナーはアッシュルパニパルの王碑文の一節(Streck 1916, 2-5)に基づいて、王位継承のための誓約文書であることを指摘していた。その一節の大意は「私の父エサルハドンは、上の海から下の海に至るアッシリアの大小の人々を集めて、私が将来アッシリアの王権を行使するように、私の皇太子の地位を守るように誓約させた」(渡辺2013, 56; Novotny/Jeffers 2018, 231)というものであった。ワイズマンはこの箇所を引用しながらも(Wiseman 1958a, 3)「宗主権条約」と判断したことになる。アッシュル版のさらなる断片2点がベルリン国立博物館の所蔵物からE. フラムによって同定されている(Frahm 2009, 135-135; 255; 渡辺2017, 13-15)。
- 4) ワイズマンによれば、クエンジュク(古代のニネヴェ)出土の粘土板文書のなかで最大のK 4349(大英博物館蔵。Litke 1998参照)と同じ大きさであるが、厚さはESODほどではないという(Wiseman 1958a, 1, n.6)。
- 5) 筆者の推測では、たとえばメディア地方の小領主の世代交代があつて新しい領主が来たならば、固有名詞の訂正のため、別の粘土板に書き直したはずである(渡辺2017, 14)。または何かの手違いで出頭しなかったとしても、彼らの優先順位は低

く、そのままにされた可能性もある。優先順位が高いのは、王位継承者に近い兄弟たちと王宮内部の者たち、そしてアッシリアとバビロニアの要人たちである。

- 6) 古代名クナリア (またはキナルア、キナリアほか) はアッシリア王の王碑文などから知られていたが (Hawkins 1976–1980 参照)、タイナト版がクナリアの代官のために発行されていたことから、テル・タイナトの古代名が確定した。
- 7) ただし代官用の ESOD であっても、後半部の「帰結節」にある「呪いの言葉」はほぼ共通しているため、不幸が家族や子孫にも及ぶという表現も共通する。
- 8) 従属節のなかの動詞は接続法であるが、問題は条件節のなかの接続法であった。前述したように (I.3.) フォン・ゾーデンの文法書は「不明」とするが、次のように誓いの表現法であるとも説明していた。「誓いは、それに違反する場合の短縮された自己呪詛である。このことから頻繁に肯定的な表現のために否定的な表現が、そして否定的な表現のために肯定的な表現が用いられること、そして主節と条件節でも接続法が多く用いられることもおそらく同様に説明できる」(von Soden 1995 [1953], §185; 下線渡辺)。これはヘブライ語の古い文法書のなかの誓いの表現法 (Gesenius/Kautsch 1909, §149) として書かれていることに依拠している。しかし現在知られているヘブライ語に接続法はない。また ESOD のように第 2 人称の条件節では、誓いの表現にはなり得ない。条件節だけがあつて帰結文が続かない場合に、否定と肯定を逆にして訳すことは、現代語に訳す場合には許されても、アッカド語文法の解明にはつながらない。ESOD では帰結文は (たとえ直接に続かないとしても) 欠けていないのであり、肯定と否定を逆にして訳すことは間違いである。ワイズマンも条件節 (動詞が接続法) を誓いの表現とした、「呪いの言葉」が条件節の帰結文にあたりと了解していなかった。筆者が「もし万が一にもあなた方が…する (接続法) ならば」と訳す条件節を、ワイズマンは「あなた方は誓う、…しないことを」(Wiseman 1958a) と訳した。その後、E. ライナー (1924–2005 年) が「エサルハドン宗主権条約」の表題で新英訳 (Rainer 1969) を、R. ボルガー (1929–2010 年) が「メディアの領主たちとのエサルハドン宗主権条約」の表題で独訳 (Borger 1983) した。彼らも一流のアッシリア学者であったが、バビロニア語方言しか知らず、直説法と接続法の違いを無視した。タイナト版を公刊したローインガーはわずかな行数を英訳したが、やはり直説法と接続法を区別しなかった (Lauinger 2012, 112; 渡辺 2013, 64 参照)。しかし彼はその後、筆者の訳し方 (Watanabe 2014, 157) を取り入れている (Lauinger 2016, 309; 渡辺 2017, 22 参照)。
- 9) 「町の家」が、「リンムの家」(ビート・リーミム) と呼ばれたことについて Dercksen 2003, 52–60 参照。リンム (*limmu*)、より古くはリームム (*limum*) とは、前 1972 年にアッシリアに始まった暦制であり、毎年異なる役人が選ばれて、その名が年の名とされた。1992 年にアナトリアのキュルテペ (古代のカニシュ)

で発見された最古の「リンム表」を、2003年に公刊した K. R. フェーンホーフは、古アッシリア時代の王エリシュム1世がリンム（エポニウム）制度を前1974年に開始したとしたが（Veenhof 2003, 57; 渡辺 2009, 657–663）、その後の研究で前1972年に訂正された（Barjamovic et al. 2012 参照）。

10) §34b: 393–396

a³⁹³ *ana urki ūmē ana (ūmē) šāti Aššur ilkunu*

a³⁹⁴ *Aššur-bāni-apli mar^oa šarri rabi^u (=GAL) ša bēt ridūti/e bēlkunu*

a³⁹⁵ *mar^oekunu mar^oē mar^oekunu*

a³⁹⁶ *ana mar^oēšu lipluhū*

行数の前の「a」は、その行がアッシリア語の、「b」はバビロニア語の文法、表現、語彙で、「ab」は双方が混ざった形で書かれていることを意味する。

11) §35: 397–409 の後半 (405–409)

ab⁴⁰⁵ *kunuk rubē rabē anni^e ša adē ša Aššur-bāni-apli marⁱ šarri rabiⁱ*

a⁴⁰⁶ *ša bēt ridūti/e marⁱ Aššur-aḥu-iddina šar māt Aššur bēlkunu*

a⁴⁰⁷ *ina libbi šaṭirūni ina kunukki ša Aššur šar ilānī*

a⁴⁰⁸ *kanikūni ina pānēkunu šakinūni*

a⁴⁰⁹ *kī ilīkunu lā tanaššarāni*

12) ここではアッカド語本文の翻字 (transliteration) を示す。

表面 1 [d]GISKIM-MAŠ MAN ŠÁR A dSALIM-nu-MAŠ MAN KUR aš-šur

2 KUR-ti KUR kára-du-<ni-ši> mu-né^l-kír SAR-ia MU-ia

3 aš-šur dIM MU-šú KUR-su lu-ḫal-li-qu

4 NA₄.KIŠIB an-nu-u TA* KUR aš-šur ana KUR URI.KI šá-ri-ik ta-din

5 ana-ku^{md30}-PAP.MEŠ-SU MAN KUR aš-šur

6 ina 6 me MU.MEŠ KÁ.DINGIR KUR-ud-ma

7 TA* NÍG.GA KÁ.DINGIR us-se-ši-áš-šú

底面 8 NÍG.GA ša-ga-ra-ak-ti-šur-ia-aš LUGAL KIŠ

裏面 9 dGISKIM-MAŠ MAN ŠÁR A dSALIM-nu-<MAŠ> MAN KUR aš-šur

10 [KUR-t]i KUR kára-du-ni-ši mu-né^l-kír SAR-ia MU-ia

11 aš-šur dIM MU-šú KUR-su lu-ḫal-li-qu

12 NÍG.GA ša-ga-ra-ak-ti-šur-ia-aš LUGAL KIŠ

13 šá ina UGU NA₄.KIŠIB ša ZA.GÌN

13) 「アパ・ラバーヌ」の仕草はエサルハドンに受け継がれるが、その後は伝統的な「ウバーナ・タラーツ」にもどっている。Magen 1986, 137–169 参照。

14) キッチン／ローレンスは、『古代近東の条約、法、契約』3巻によって「禿鷹碑文」（「禿鷹」ではなく「禿鷲」の命名は前川 2011, 20–25 による）を含めて、こ

れまでに知られる関連文書の英訳を取録している。残念ながら ESOD のタイナト版の公刊直前であったため、ESOD の訳文はバルボラのもの (Parpola/ Watanabe 1988, 28–58) を採用している (Kitchen/ Lawrence 2012, I, 963–1002)。

参考文献

- アルベルツ、R. 2010: 『ヨシヤの改革』(高橋優子訳) 教文館 (R. Albertz, *Religionsgeschichte Israels in alttestamentlichen Zeit*, Göttingen 1992, 304–373)。
- ウォーカー、クリストファー 1995: 『楔形文字』(大城光正訳) 学藝書林 (C. B. F. Walker, *Cuneiform*, 1987, London)。
- 前川和也 2009: 「メソポタミア文明の誕生」『世界の歴史1 人類の起原と古代オリエント』(文庫版) 中央公論新社、163–205 (初版: 中央公論社 1998)。
- 2011: 『図説 メソポタミア文明』河出書房新社。
- 渡辺和子 1987: 「『エサルハドン宗主権条約』再考」『宗教研究』61-2、113–133。
- 1992: 「古代オリエントの誓約と神の印章」脇本平也/柳川啓一編『現代宗教学4 権威の構築と破壊』東京大学出版会、85–114。
- 1998: 「アッシリアの自己同一性と異文化理解」前川和也ほか『岩波講座 世界歴史2 オリエント世界—7世紀』岩波書店、271–300。
- 2009: 「アッシリアとフリ人の勢力」「国際関係の時代」「大帝国の興亡」「文庫版あとがき—古アッシリア時代の「リンム表」公刊」『世界の歴史1』(文庫版) 中央公論新社、286–416; 657–663 (初版: 中央公論社 1998)。
- 2013: 「『エサルハドン王位継承誓約文書』のタイナト版による新知見と再検討—条件節における接続法の用法を中心に」『オリエント』56、55–70。
- 2017: 『エサルハドン王位継承誓約文書』リトン。
- 2018: 「メソポタミアのシャーマニズム論序説—『ギルガメシュ叙事詩』を手がかりに」杉木恒彦/高井啓介編『霊と交流する人びと』下巻、リトン、33–82。
- 2020: 「メソポタミアの祈りの媒介物—「奉納物」と「礼拝図」を中心に」津曲真一/細田あや子編『媒介物の宗教史』下巻、リトン、175–222。
- Barjamovic, G./ Hertel, Th./ Larsen, M. T. 2012: *Ups and Downs at Kanesh: Chronology, History and Society in the Old Assyrian Period*, Leiden.
- Borger, R. 1983: “Assyrische Staatsverträge”, Kaiser, O. (ed.), *Rechts- und Wirtschaftsurkunden, Historisch-chronologische Texte*, Gütersloh, 160–176.
- Caplice, R. 2002: *Introduction to Akkadian*, Fourth edition, Rome.
- Dekiere, L. 1996–1997: *Mesopotamian History and Environment. Texts II: Old Babylonian Real Estate Documents*, Part 1–6, Ghent.

- Dercksen, J. G. 2004: *Old Assyrian Institutions*, Leiden.
- Edel, E. 1997: *Der Vertrag zwischen Ramses II. von Ägypten und Ḫattušili III. von Ḫatti*, WVDOG 95, Berlin.
- Frahm, E. 2009: *Historische und historisch-literarische Texte*, Keilschrifttexte aus Assur literarischen Inhalts 3, WVDOG 121, Wiesbaden.
- Frayne, D. R. 2008: *Presargonic Period (2700-2350 BC)*, RIME 1, Toronto.
- George, A. R. 1986: "Sennacherib and the Tablet of Destinies", *Iraq* 48, 133–146.
- 2010: "Obituary: Professor D. J. Wiseman (1918–2010)", *Iraq* 72, v–viii.
- Gesenius, W./ Kautzsch, E. 1909: *Hebräische Grammatik*, 28. Aufl., Leipzig.
- Grayson, A. K. 1987: Assyrian Rulers of the 3rd and 2nd Millennia BC (to 1115 BC), *The Royal Inscriptions of Mesopotamia, Assyrian Periods* 1, Toronto.
- Grayson, A. K./ Novotny, J. 2014: *The Royal Inscriptions of Sennacherib, King of Assyria (704–681 BC)*, Part 2, RINAP 3/2, Winona Lake.
- Harrison, T. P./ Osborne, J. F. 2012: "Building XVI and the Neo-Assyrian Sacred Precinct at Tell Tayinat", *Journal of Cuneiform Studies* 64, 125–143.
- Hawkins, J. D. 1976–1980: "Kinalua", *RIA* 5, 597–598.
- King, L. W. 1904: *Records of the Reign of Tukulti-Ninib I*, London.
- Kitchen, J. A./ Lawrence, P. J. N. 2012: *Treaty, Law and Covenant in the Ancient Near East*, I–III, Wiesbaden.
- Koch, Ch. 2008, *Vertrag, Treueid und Bund*, Berlin.
- Koliński, R. 2015: "The Mari Eponym Chronicle", *Anatolica* 41, 61–86.
- Korošec, V. 1931, *Hethitische Staatsverträge zu ihrer juristischen Wertung*, Leipzig.
- Lambert, W. G. 1983: "The God Aššur", *Iraq* 45, 82–86.
- Lauinger, J. 2012: "Esarhaddon's Succession Treaty at Tell Tayinat: Text and Commentary", *Journal of Cuneiform Studies* 64, 87–123.
- 2016: "Neo-Assyrian Scribes, "Esarhaddon's Succession Treaty", and the Dynamics of Textual Mass Production", Delnero, P./ Lauinger, J. (eds.), *Texts and Contexts*, 285–314.
- Leichty, E. 2011: *The Royal Inscriptions of Esarhaddon, King of Assyria (680–669BC)*, RINAP 4, Winona Lake.
- Litke, R. L. 1998: *A Reconstruction of the Assyro-Babylonian God-Lists*, New Haven.
- Luukko, M. 2004: *Grammatical Variation in Neo-Assyrian*, SAAS 16, Helsinki.
- Machinist, P. 2011: "Kingship and Divinity in Imperial Assyria," Renger (ed.) 2011, 405–430.

- Mallowan, M. E. L. 1958; “Foreword”, *Iraq* 20, pp.i–ii.
- Mendenhall, G. E. 1954: “Covenant Forms in Israelite Tradition”, *BA* 17, 50–76.
- Menzel, B. 1981: *Assyrische Tempel*, I–II, Rome.
- Niederreiter, Z. 2015: “Cylinder Seals of Eleven Eunuchs (*ša rēši* Officials): A Study on Glyptics Dated to the Reign of Adad-nērārī III,” *SAAB* 21, 117–156.
- Novotny, J./ Jeffers, J. 2018: *The Royal Inscriptions of Ashurbanipal (668–631 BC), Aššur-etel- ilāni (630–627 BC), and Sîn-šarra-iškun (626–612 BC), Kings of Assyria*, Part 1, RINAP 5/1, Pennsylvania.
- Oppenheim, A. L. 1977: *Ancient Mesopotamia: Portrait of a Dead Civilization*, Revised version completed by E. Reiner (Original edition: 1964).
- Otten, H. 1988: *Die Bronzerafel aus Boğazköy. Ein Staatsvertrag Tuthalijas IV.*, Wiesbaden.
- Parpola, S./ Watanabe, K. 1988: *Neo-Assyrian Treaties and Loyalty Oaths*, SAA 2.
- Parpola, S. 2017: Assyrian Royal Rituals and Cultic Texts, SAA 20.
- Postgate, J. N. 2011: “Die Stadt Assur und das Land Assur”, Renger (ed.) 2011, 87–94.
- Radner, K. 2006: “Provinz. C. Assyrien”, *RIA* 11/1–2, 42–68.
- Reiner, E. 1969: “The Vassal Treaties of Esarhaddon”, Pritchard, J. B. (ed.), *Ancient Near Eastern Texts*, 3rd edition, Princeton, 534–541.
- Renger, J. (ed.) 2011: *Assur — Gott, Stadt und Land*, Wiesbaden.
- von Soden, W. 1995: *Grundriss der akkadischen Grammatik*, 3., ergänzte Auflage, Roma [die erste Auflage 1952].
- Steymans, H. U. 2013: “Deuteronomy 28 and Tell Tayinat”, *Verbum et Ecclesia* 34 (2) #870, 13 pages. <http://www.ve.org.za/index.php/VE/article/view/870/1867>
- Veenhof, K. R. 2003: *The Old Assyrian List of Year Eponyms from Karum Kanish and Its Chronological Implications*, Ankara.
- Watanabe, K. 1984: “Die literarische Überlieferung eines babylonisch-assyrischen Fluchthemas mit Anrufung des Mondgottes Sîn”, *ASJ* 6, 99–119.
- 1985: “Die Siegelung der ‘Vasallenverträge Asarhaddons’ durch den Gott Aššur”, *Baghdader Mitteilungen* 16, 377–392, Tf.33.
- 1987: *Die adê-Vereidigung anlässlich der Thronfolgeregelung Asarhaddons*, *Baghdader Mitteilungen* Beiheft 3, Berlin.
- 1988: “Die Anordnung der Kolumnen der VTE-Tafeln”, *ASJ* 10, 265–266.
- 1989: “Mit Gottessiegeln versehene hethitische ‘Staatsverträge’”, *ASJ* 11, 261–276.

- 1993: “Neuassyrische Siegellegenden”, *Orient* 29, 109–137.
- 1999: “Seals of Neo-Assyrian Officials”, Watanabe, K. (ed.), *Priests and Officials in the Ancient Near East*, Heidelberg, 313–366.
- 2014: “Esarhaddon’s Succession Oath Documents Reconsidered in Light of the Tayinat Version”, *Orient* 49, 145–170.
- 2015: “Innovations in Esarhaddon’s Succession Oath Documents Considered from the Viewpoint of the Documents’ Structure”, *SAAB* 21, 173–215.
- 2017: “A Study of Assyrian Cultural Policy As Expressed in Esarhaddon’s Succession Oath Documents”, Baruchi-Unna, A. et al. (eds.), “*Now it happened in those days*”: *Studies presented to Mordechai Cogan*, Winona Lake, 473–492.
- 2019: “Aššurbanipal and His Brothers Considered from the References in Esarhaddon’s Succession Oath Documents”, I. Nakata et al. (eds.), *Prince of the Orient: Studies in Memory of H.I.H. Prince Takahito Mikasa*, 237–257.
- 2020: “Adoration of the Oath Documents in Assyrian Religion and Its Development”, *Orient* 55, 71–86.
- Weidner, E. F. 1939-1940: “Assurbânipal in Assur”, *Archiv für Orientforschung* 13, 204–218, Tf. XIV.
- Weinfeld, M. 1972: *Deuteronomy and Deuteronomistic School*, Oxford.
- Wiseman, D. J. 1958a: “The Vassal-Treaties of Esarhaddon”, *Iraq* 20, 1–99; pls. I–XII; pls. 1–53.
- 1958b: “Abban and Alalah”, *Journal of Cuneiform Studies* 12, 124–129.
- 1959: “Ration Lists from Alalakh VII”, *Journal of Cuneiform Studies* 13, 19–33.

略号

ASJ	<i>Acta Sumerologica</i>
BA	<i>Biblical Archaeologist</i>
RIME	The Royal Inscriptions of Mesopotamia, Early Periods
RINAP	The Royal Inscriptions of the Neo-Assyrian Period
RIA	<i>Reallexikon der Assyriologie und Vorderasiatischen Archäologie</i>
SAA	State Archives of Assyria, Helsinki
SAAB	<i>State Archives of Assyria Bulletin</i>
SAAS	State Archives of Assyria Studies
WVDOG	Wissenschaftliche Veröffentlichungen der Deutschen Orient-Gesellschaft